

## ベルクソン『物質と記憶』を診断する

時間経験の哲学・意識の科学・美学・倫理学への展開

平井靖史・藤田尚志・安孫子信 編

村山達也

カミーユ・リキエ（天野恵美理訳）

藤田尚志

檜垣立哉

バリー・デイントン（木山裕登訳）

清水将吾

平井靖史

永野拓也

デイヴィッド・クレプス（齋藤俊太訳）

太田宏之

マイケル・R・ケリー（山根秀介訳）

ジャン＝リュック・プチ（原健一＋田村康貴訳）

兼本浩祐

三宅岳史

ユリア・ポドロガ（持地秀紀訳）

増田靖彦

書肆心水

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

カバー原画 伴野亜希子

目次 ベルクソン『物質と記憶』を診断する

序 ..... 平井靖史 9

第1部 読解の諸問題

1-1

潜在性とその虚像——ベルクソン『物質と記憶』における潜在性概念

..... 村山達也 20

1. 創造的な、あまりに創造的な——ドゥルーズ『ベルクソン哲学』における潜在性概念 22
2. ベルクソンから遠く離れて——だが、いかなる意味で？ 24
3. 潜在性の辞書作り 26
4. 結論と補足——ドゥルーズの可能性 31

1-2

『物質と記憶』と形而上学の直観的再興

——純粹理性の第四誤謬推論と第一・第二アンチノミー

..... カミーユ・リキエ（天野恵美理訳）37

1. 『物質と記憶』の位置づけ 40
2. 『物質と記憶』と、純粹理性の第四誤謬推論の止揚 43
3. 『物質と記憶』と数学的アンチノミーの止揚 50

〈コラム〉「永いあいだ客として遇されてきた異邦人」

——リキエによるベルクソンのカント主義解釈をめぐって..... 藤田尚志 59

1-3

記憶の場所の論理——『物質と記憶』における超図式論と潜在論

..... 藤田尚志 83

1. ベルクソンの未来 83
2. monumental と immémorial——場所の論理探究としての『物質と記憶』 85
3. カントとの対決——超図式論（hyper-schématisme） 88
4. 知覚の situs 90
5. Spacing imagination——図式論の臨界点としての記憶 91

6. 記憶の locus——純粹記憶の無為 93

1-4

過去は何故そのまま保存されるのか——『物質と記憶』の記述の多層性について  
..... 檜垣立哉 99

1. 問題の所在 99
2. 方法論としての第四章——後ろから読む『物質と記憶』 102
3. 始めから読む『物質と記憶』 103
4. 過去は何故すべてが保存されるのか 106

《コラム》記憶力の二形態..... 村山達也 112

## 第2部 心と時間

2-1

ベルクソンにおける在ること・夢見ること・見ること  
..... バリー・デントン（木山裕登訳）122

1. ベルクソンの汎心論 123
2. 汎心論から全体論へ 125
3. 直接实在論と選言主義 130
4. 夢見ることと見ること——知覚のハイブリッド説 133
5. 時間経験のオーバーラップモデル 137
6. おわりに 142

《コラム》いかにして記憶は感覚を生み出すのか——形相からの質料の「発出」  
..... 清水将吾 154

2-2

〈時間的に拡張された心〉における完了相の働き  
——ベルクソンの汎質論と現象的イメージ..... 平井靖史 160

1. 時間的延長が心を構成する 160
2. ベルクソンの汎質論 163
3. 生物進化におけるシステムの時間的拡張 165
4. 感覚質と情報圧縮 169
5. ベルクソンにおける原現象性質 171
6. 感覚質からイメージ、心へ 173
7. 時間的拡張と完了相 177

《コラム》 心の出現——散逸構造と持続 ..... 永野拓也 186

## 第3部 科学との接続

### 3-1

『物質と記憶』と深層学習 ..... デイヴィッド・クレプス（齋藤俊太訳） 196

1. はじめに 196
2. 深層学習 198
3. 人間の学習 201
4. 人工知能 209
5. 未来 216

### 3-2

空間的神経表象から時間的圧縮過程へ ..... 太田宏之 226

序 226

1. 分散表象の起源 229
2. 脳の中の時間スケールの多様性 237
3. 脳の中の縮約 240

《コラム》 直接実在論と神経上の時間圧縮についてのベルクソンの議論  
——デイントン教授と太田教授へのコメント

..... マイケル・R・ケリー（山根秀介訳） 249

### 3-3

記憶力と脳——ベルクソンの誤り

..... ジャン＝リュック・プチ（原健一＋田村康貴訳） 263

### 3-4

ベルクソンの第一の記憶を理解する試み

——フロイトの記憶論と知覚失認（精神盲）の自験例を導きの糸として

..... 兼本浩祐 284

1. はじめに 284
2. 連合主義あるいはテオドール・マイネルトの記憶論 285
3. フロイトあるいはエーデルマンの記憶論 287
4. フロイトとマイネルトの記憶の比較 287
5. フロイト的・エーデルマン的文脈における記憶とは何か 288

6. 連合型視覚失認（あるいは精神盲 “cécité psychique”） 289
7. 剥き出しの第一の記憶 292
8. 第二の記憶へ 293

《コラム》 エーデルマンとフロイト、そしてベルクソン……………三宅岳史 296

## 第4部 芸術・道徳への展開

### 4-1

#### 現在の脆さ——ベルクソンと河原温

……………ユリア・ポドロガ（持地秀紀訳） 304

1. 河原温と現在を捉えること 306
2. 引き延ばされた現在 310

《コラム》 芸術の現在と時間の隘路……………増田靖彦 321

### 4-2

#### 生への注意——『物質と記憶』における道徳性の進化

……………マイケル・R・ケリー（山根秀介訳） 326

1. 道徳性の進化に関するコースガードの議論 329
2. 目的論的な意識の崩壊に関するベルクソンの議論 332
3. ベルクソンと倫理の進化 339

後書きおよび謝辞 357

人名索引 363

事項索引 371

## 序

平井靖史

2007年、安孫子信、藤田尚志両氏を中心に立ち上げられた日本ベルクソン・プロジェクト（Project Bergson in Japan、略称 PBJ）は、第一期の『創造的進化』、第二期の『道徳と宗教の二源泉』を経て、2015年から突入した第三期では『物質と記憶』の現代的再読解を集中的に行っている<sup>1)</sup>。本論集は、2016年11月に3日間に亘り開催された、第8回 PBJ 国際シンポジウム『『物質と記憶』を診断する——ベルクソンと脳・時間・記憶の諸問題』の記録である。

12名の発表者と6名の特定質問者<sup>2)</sup>、さらに併催された若手研究者セミナーの6名の発表者<sup>3)</sup>に、来場者、時には通訳者<sup>4)</sup>も加わって繰り広げられた当日の議論には、えもいわれぬ熱気がこもっていたように思う。論集化に際して、その雰囲気できるだけお届けできるよう、特定質問者を中心にコラムの新規執筆を依頼して、重厚な論文群のうちに潜むしなやかなネットワークに注意を向けられるよう配慮した。また、登壇者の論文は内容に即して順序を入れかえた<sup>5)</sup>。

『物質と記憶』に、同じベルクソンの他の著作と較べても固有の難解さがあることについては、研究者に共通の認識がある。「心身問題を時間の関数で立て直す」という基軸の下、巻頭から唐突にイマージュのシステム論が、生物進化と神経系のモデル化を通じて開陳されるや、生態学的な（脱精神化された）知覚論として一気に繰り広げられる。第二章では、有名な記憶の二分法から始まって、失認や失行、失語の豊富な事例の緻密な重ね合わせから、巧妙な二重再認論が析出される。こうしてまずは再認の現場で取り押さえられた記憶が、その本来の場所である過去に追い込まれて正体を暴かれるのが同書のクライマックスとも言える第三章だ。そこでは一見して極めて形而上学に見える時間存在論的探求の縦系によって、経験的な諸論点——解剖学的知

見に依拠した現在の時間経験、一般観念の生物学的な起源、性格のダイナミズム、多様な記憶疾患——が縫い繋がれている。続く第四章は、心身結合という哲学的課題に、空間・物質・運動といった諸概念の原理的分析を通じて、前代未聞の時間論的解決を描き出す。加えて、既存の学説との対決も縦横無尽に張り巡らされているから、議論は輪をかけて複雑になる。観念論と実在論、連合主義心理学、随伴現象説、記憶の脳局在説、現在主義、唯名論と概念論、唯物論、通俗的二元論、ゼノンのパラドクス……。多岐にわたる個別事例の分析の解像度を落とすことなく、この広大な問題群に展望を与えようとするヴィジョンの強度とその論述の横溢ぶりに、刊行から120余年の時を経てなお、この書を開く者は否応なく圧倒される。

無論、丁寧に解きほぐしていけば、極めて整合的にして魅力的な着想がそこに浮かび出てくることは、ジル・ドゥルーズ（1966）やフレデリック・ウォルムス（1997）らの偉大な先行研究が予示してくれていた<sup>6)</sup>。だが、肝心のそのレストア作業を体系的に進めることは、難航を極め、時代は徒に流れていったのである。

だから、今、『物質と記憶』の現代的再検討と銘打ったところで、一筋縄でいかないことははじめから予想されていた。ベルクソンその人がしたように、われわれ自身が、現代の諸科学や関連諸分野との対話を通じて、同じ問題に同じ気概で取り組む覚悟がなければ、そんな「再検討」など茶番にしかならない。われわれのプロジェクトは、この『物質と記憶』にベルクソンが埋め込んだアイデアに、最新の諸理論で真剣勝負を挑むことで、オリジナルと少なくとも同じ（かそれ以上の）解像度でこれをモデル化し直すことを、自らに課した。そして——それがゴールではない——、それに火を入れ実際に動かしてみても、モデルとしての展開（不）可能性を正確に見届けることを目指している。そのために必要なことは、従来のいわゆる大陸系哲学の国際研究の慣習をかなぐり捨てて、いわゆる同業・同分野の哲学研究者だけでなく、広く関連諸分野からの知見を結集することだった。そうした意図の下、生態学的知覚論、分析系の時間論、認知科学・神経科学、精神医学、人工知能学の研究者たちを招き討議を重ねているのである。この新しい——いわば構成論的な——アプローチは、敬愛するフランスの研究者たちから「拡張ベルクソン主義<sup>7)</sup>」との呼称を授かって、『物質と記憶』というエンジンを今の知的文脈のただ中に再起動するというわれわれの野望の、まさに推進剤となっている。



## \*

本論集所収の論考は、四つのパートに分けられている。第一部には、『物質と記憶』固有の読解上の諸問題を扱った論考を集めた。高名なドゥルーズ研究者でもある檜垣立哉氏が着目するのは、同書の論述のかなり特異な「多層性」である。実際、この書を統合的に読もうとすれば、複数の読解のレベルが意図的に織り込まれているとしか思えない箇所が多くあるのである。日本の「ベルクソン哲学研究会」の発起人にして『ベルクソンの記憶力理論』の著者である故石井敏夫氏も、一度目では元の文脈で読めるにもかかわらず、二度目では、後段の概念装置を踏まえることで別の論述として読める（そして新しい情報が得られる）ように書かれている箇所に多く出くわすと語っていた。檜垣氏は、「後ろから」逆行的に読むことで補完できる論点があることを、方法的な観点からあぶり出している。このことは、当然、全四章の相互関係についての積極的な仮説を要求する。檜垣氏自身は、議論位相の違いに基づいて1章、2+3章、4章へと三区別することを提案している。

カミーユ・リキエ氏と藤田尚志氏は、1+4章を2+3章と対置させる二区分を作業仮説としている。『物質と記憶』の新社訂版の責任編者であるリキエ氏によれば、2+3章はデカルト的な心身問題、1+4章はカント的な認識論の圏域にある。一般に反カント的な側面が強調されすぎるベルクソンのうちに、極めて忠実なカント読解とそれへの応答を見いだせることを、鮮やかに示しているのが彼の論考である。フランス人らしい、適確な哲学的知識と綿密な読解に基づく、正統派の論考として現在の『物質と記憶』読解の一つの水準を示している。

藤田氏もまた同じ分類を採用するが、知覚論と記憶論として対比されつつ、一貫してカントの図式論との対決の文脈で読み解かれると主張する。刊行が待たれる彼自身のベルクソン論（その連載を勁草書房のウェブサイトで読むことができる<sup>8)</sup>）の骨格の一部を先取りして覗える点で、貴重な論考である。知覚と記憶を、*situs* / *locus* という異なる場所概念によって対比するなど、随所に登場する独創的な読解装置の数々は、『物質と記憶』に多くの新しい解釈線を刻み込んでいく。密接な関係にあるリキエ解釈については、彼の重厚なコラムを参照することで、より立体的な理解が得られるはずである。

そのコラムでも触れられているように、避けて通ることができないのが、

ルクソン、とりわけ『物質と記憶』解釈史におけるドゥルーズの役割である。文字通り研究界がドゥルーズ色に染め上げられていた時期からすれば、現在の研究は確実にポスト・ドゥルーズの時代に突入していると言えるが、ドゥルーズの解釈がただ忘却されたり一掃されたりしたわけではない。むしろ、その功罪を精算し、引き継ぐべき相続分を確定する時期を迎えたということだ。折しも檜垣氏と小林卓也氏によるドゥルーズの『ベルクソニズム』の実に40年以上ぶりになる新訳が登場したところである<sup>9)</sup>。冒頭を飾る村山達也氏の論考は、まさにドゥルーズのベルクソン解釈を象徴する中心概念たる「潜在性」をめぐる、この作業の必要性を模範をもって示している。軽妙に、しかし残酷なほどの鋭さで、解釈の贅肉をそぎ落としていくストイックな陳述には、確たる研究倫理が張り詰めている。二つの記憶力を、ライルの技術知と命題知という新たな光で照らしだすコラムも必読である。

第二部では、現代の時間論および心の哲学と正面から組み合うことで、『物質と記憶』の核となる理論構造の輪郭を削り出していく作業が行われる。この点で、現代の時間経験の哲学における中心的論客であるバリー・デントン氏の継続的な協力は、本プロジェクトにとって象徴的な意味がある。昨年度論集『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する』の序論にも書いたが、ベルクソンの知名度における名目と実態の隔たりにはほとんど度を越したものがある。高校でも習うような持続の哲学者でありながら、現代の哲学的時間論のアンソロジーには索引にすら名前が挙がらない状況が、ごく近年まで続いてきた。だがデントン氏によって、これまで曖昧に「主観的現在における意識の流れ」と括られてきたもののうちに、ある決定的な区別、すなわち表象内容のみの持続を認める（その意味でまさに「見かけの現在」の幅しか認めない）「把持主義」と、実在的な時間的延長を認める「延長主義」の区別が打ち立てられるや、時間の哲学のうちに、神経科学から美学理論までを巻き込んだまったく新しい議論地平が切り開かれたのである。その活況ぶりにはめざましいものがある。二年前、われわれは、まさにその観点からのベルクソンの再検討に、彼を招き入れたのだった。

かくして、本年2017年5月に出版された最新の『ラウトリッジ 時間経験の哲学ハンドブック』では、彼の執筆による「一章」がベルクソンにあてられるに至った<sup>10)</sup>。いわゆる分析系の哲学者の手で、ベルクソンについてこ

ここまでコミットされた解釈が呈示されたことは皆無だったから、画期的と言ってよいだろう。再発見は時間論にとどまらない。初年度から彼はベルクソンの「直接実在論と汎心論という新しい組み合わせ<sup>11)</sup>」に多大な関心を寄せており、本書所収の論考においては、(これまた近年発展の著しい)知覚の哲学における「選言主義」との対比が行われている。ベルクソンでは知覚理論も心身論も時間論を核にしているから、持続の分析的理解が深まることで今後飛躍的に他の諸論点についての説明が進むことも期待できるかもしれない。

平井靖史もまた、出来事存在論や A / B 理論など分析系の解釈格子からベルクソンの時間論の再モデル化を継続してきた自身の研究<sup>12)</sup>を踏まえつつ、「二重知覚システム説」、「非ブロック的ハイブリッド成長宇宙説」を呈示してきた。本年度の論考では、「時間単位の非還元主義的多元論」とそこから導かれる「汎質論」から、凝縮と現象的イメージの問題を扱っている。システムのサイズに見合った時間単位が、排他的でない仕方で並立することを認めることが、ベルクソンの〈意識の遅延テーゼ〉の鍵だと考えるが、これがなかなか伝わりにくい論点で、シンポジウムでのコメントや反省を踏まえ、意を尽くして書き改めてみた。永野拓也氏による解説も参照の上、どこまで「使える」ものになっているか、是非批判的に検討していただきたい。

第三部には、諸科学との対話を試みる論考が並ぶ。2015年に現代諸科学理論の観点からベルクソン哲学の全面的な再検討を独力で果たした『ベルクソン、複雑性、創造的創発』の著者であるデイヴィッド・クレプス氏には、深層学習の見地からの考察を依頼した。進展著しい人工知能学との対照は、われわれが心を持つことの意義を浮き彫りにするために欠かすことのできない本質的作業である。そこには、「記憶」や「学習」といった語彙についての根深い不透明性と固有の「滑りやすさ」がある。このことは、翻ってベルクソンの諸タームを扱う際にも肝に銘じなければいけない点である。彼の書籍で詳しく論じられている「カオス系」「アトラクター」「散逸構造」といった諸概念の理解には、永野氏によるコラムが役立つだろう<sup>13)</sup>。

ベルクソンの凝縮概念を軸に脳神経の研究を進めている太田宏之氏の論考は、モデルに実証的基盤を与えるという別の意味でわれわれのプロジェクトにとって本質的である。彼の研究の際だった点は、何よりもまず、脳神経の一本一本について実際に計測された反応遅延特性に基づいて、われわれの脳

が、フォン・ノイマン型コンピュータと異なり、中央クロックをもたない非同期的な〈持続の多元論〉を実装していることを示す点にある。そこから、並列的な処理プロセスが、その情報交換において互いに時間的縮約をしつつ、必然的に競合することが導ける。この競合が意識の鍵となる。自然主義を貫くところから純粹持続が導き出されるのである。

日本では『労働の現象学』の邦訳で知られるジャン＝リュック・プチ氏であるが、近年は現象学の自然化の仕事に力点を置いており、アラン・ベルトーズとの仕事（『現象学と行為の生理学』<sup>14)</sup>）などが有名である。ベルクソン自身が神経の構造に言及しつつ議論を組み立てていることもあって、認知神経科学との突き合わせは必須である。この試みは1990年代にフィリップ・ガロワたちによって刊行された『ベルクソンと神経科学』<sup>15)</sup>でもなされているが、この間に果たされた双方の研究の進展により別な水準の議論が見えてくるはずである。今回はスケジュール上かなり無理を言って登壇をお願いした経緯もあり論点は部分的なものにとどまるが、それでも海馬における場所細胞と認知地図の綿密な検討を通じて、脳とエピソード記憶の関係についての通俗的なベルクソン解釈に対して根本的な問題提起を差し向ける手さばきは、見事と言うほかない。

愛知医科大学精神科学講座の教授で、てんかん研究の第一人者である兼本浩祐氏には、ご自身の診られた視覚失認の事例をもとに、ベルクソンの身体記憶を中心に論じていただいた。フロイトの失語症論が収められた『フロイト全集』第一巻の責任編者でもある兼本氏が、2011年に出された『心はどこまで脳なのだろうか』は、精神医学の見地から哲学的・心身問題に真っ向から取り組むという類い希な書物である。詳細な事象分析と浩瀚な医学的・生理学的・哲学的知識を繰り出す魅力溢れる議論は、精神医学者たちに哲学を導入するという体裁で書かれていながら、実際には逆に哲学者こそがそこから学ぶべき点を多く含む。デネットの議論をベルクソンに接続する<sup>16)</sup>ほどの眼力とオープンさが、果たして現今のどれほどの哲学研究者にあるだろうか。本書所収の論考では、シナプス接続についての現代の理解に照らすならば、通常は安定した脳神経ネットワークのうちに局在化されると解釈して済まされがちなベルクソンの身体記憶そのものが、じつは明滅的な本性のものにすぎず、対象によって励起されている当座においてしか現実化しないという、見落とされ続けた論点へ解釈者の反省を誘っている。是非とも三宅岳史氏によ

る解説と併せ読んでいただきたい。

『物質と記憶』から引き出された時間と心の哲学の展開可能性を見届けるのが、第四部である。フランスとスイスに拠点を置いて活動するユリア・ポドロガ氏には、テキストで用いられる比喩や図像に着目した『持続において思考する——ベルクソン そのイメージを辿って』<sup>17)</sup> という印象的な書物がある。彼女に本プロジェクトの主旨を伝え、ベルクソンモデルの芸術論的展開を打診したところ、ロシア・アヴァンギャルドの専門家でもある彼女が選んだのは、時間の記録をモチーフとするコンセプチュアル・アーティスト、河原温だった。普通、デントンら哲学の分野での時間経験の分析対象は、言うまでもなく日常的なそれであるが、対して河原氏らによって試みられているのは、まさに芸術体験を通じて人々を通常の持続の流れから切り離すという実験である。未来や過去からの人為的な抽象の具体的実践、この異例なる体験を、『物質と記憶』の道具立てによってどのように分節・構造化できるか。この上なくスリリングな分析は、拡張ベルクソン主義の名にふさわしい緻密さと大胆さを兼ね備え、独特の輝きを放っている。特定質問を担当された増田靖彦氏のみならず、通訳を担当した清水将吾氏も、デントンに並んでポドロガ氏の論考を選び、そこからベルクソンとも関わりの深いプロティノスへと補助線を延ばしてくれている。他方、ポドロガから方法の問題を扱う檜垣へと接続する増田氏のコラムは、本書の第一部へ読者を連れ戻してくれるはずである。

英語で編まれた重要な論集『ベルクソンと現象学』<sup>18)</sup> の編者であるマイケル・R・ケリー氏も、打診の当初から、拡張ベルクソン主義の趣旨に大いに賛同し、数度の打ち合わせを通じて、敢えて冒険的な主題に取り組む決意をしてくれた。道徳性の進化を扱った書物としては、ベルクソンには最晩年に『道徳と宗教の二源泉』がある。だが、ケリー氏は、コースガードやフランクファート（二階の意欲）らの諸議論と突き合わせることから、『物質と記憶』第三章の記憶の逆円錐を用いた性格論のうちに、まさに道徳性の起源に導く観念の鉱脈を掘り当てるのである。彼には、デントン論文と太田論文についてのボリュームあるコラムでも貢献していただいたが、これを読めば、英語圏だけのフランス哲学だけの口にすることが、もはや意味の無いことであることがよく分かるだろう。

\*

言うまでもないことだが、本プロジェクトのような試みは、決して単身で行えるような性質のものではない。多才な研究者たちによる、文字通りの協働を通じてしか、しかも極めて漸進的な仕方ではしか、果たされえないものだ<sup>19)</sup>。だが、それこそ形而上学が「実証的 (positive)」であるための、何よりの徴しである。諸学との対話を含む本質的に多元的な活動 (持続の多元論!) として哲学の営みを思い描いていたのは、ベルクソンその人であった。

この種の哲学が1日にしてなることはあるまい。[ひとりの天才の作品と違って、] ……それは多くの思想家たち、加えて多くの観察者たちが互いを補い、互いを修正し矯正し合いつつ、集合的にして漸進的な努力を投じることでしか構築される見込みはあるまい。だから、本試論が目指すのは、巨大なる諸問題を一挙に解決するというのではない。ただ方法を定義し、いくつかの本質的な論点において、この方法を適用する可能性を垣間見せようと望むまでである<sup>20)</sup>。

われわれの試みも、まだその端緒についたばかりである。そのわずかな成果があるとすれば、それはすべて、上述のような異例の感性与実力を併せ持つ研究者たちによる深い賛同と惜しめない協力を恵まれたこと、それに尽きる。残された短い期間でどこまで進めるかは、まったく分からない<sup>21)</sup>。だがもし、ベルクソン哲学が忘却される日が来るならば、そしてそれがちゃんと役目を果たした後のことであれば、むしろ望ましいことだ。それはその哲学が永遠の虚像ではなく、現実を持続し、「日付」をもった証しであるから。

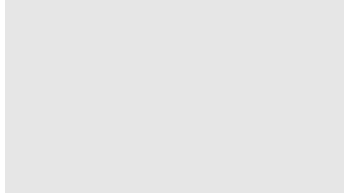
強調しておきたいことは、われわれのプロジェクトを通じて、「ベルクソン哲学に何が説明できないか」もまた、相応の精度で言えるようになってきていることである。例えば、太田氏が指摘するような抑制系のメカニズム一般が、ベルクソンの神経理解のうちに欠けていることは、人間の生理学的な理解に本質的な影響をもつだろう。記憶力の内には、凝縮と拡張の拮抗運動が確かに設定されているのだが、身体の側に相当する機構が欠けているのである。

## 注

- 1) 平井が代表を受け継いだのは、現行の第三期においてである。現在のメンバーは安孫子信（法政大学）、藤田尚志（九州産業大学）、合田正人（明治大学）、杉村靖彦（京都大学）、檜垣立哉（大阪大学）。これまでの PBJ の歩みと、とりわけ前二期で藤田尚志氏の力強い意志のもと果たされた国際協働研究ネットワークの変革については、前年度論集、『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する——現代知覚理論・時間論・心の哲学との接続（以下『解剖』と略）』（平井靖史＋藤田尚志＋安孫子信編、書肆心水、2016 年）に収められた藤田氏による「はじめに」および安孫子氏による「後書きにかえて」を一読いただければ幸いである。
- 2) 藤田尚志（九州産業大学）、マイケル・R・ケリー（サンディエゴ大学）、三宅岳史（香川大学）、永野拓也（熊本高等専門学校）、増田靖彦（龍谷大学）、村山達也（東北大学）の各氏。
- 3) 岡嶋隆佑、松井久、笠木丈、小杉将誠、中原真祐子、佐藤愛の各氏。
- 4) 清水将吾（日本大学）、石渡崇文（東京大学）の両氏。
- 5) 序は代表として平井が執筆しているが、共編者である安孫子信、藤田尚志両氏も、本書の編纂にあたって部構成・タイトル決定・校正など全般に亘って本質的な仕方で関与していることを付言しておく。
- 6) Gilles Deleuze (1966), *Le Bergsonisme*, p.u.f. ; Frédéric Worms (1997), *Introduction à Matière et mémoire de Bergson*, p.u.f. どちらの著作も、『物質と記憶』の質的分量に比して極めてコンパクトな部類に属する。
- 7) ポール＝アントワヌ・ミケル＋エリー・デューリングによる拡張ベルクソン主義マニフェスト文、「われらベルクソン主義者 京都宣言」（藤田尚志訳）は、『解剖』に特別付録として掲載されている。
- 8) <http://keisobiblio.com/author/fujitahisashi/>
- 9) ジル・ドゥルーズ『ベルクソニズム〈新訳〉』（檜垣立哉・小林卓也訳）、法政大学出版社、2017 年。
- 10) Barry Dainton, “Bergson on temporal experience and durée réelle” in Ian Phillips, *The Routledge Handbook of Philosophy of Temporal Experience*, Routledge, 2017, pp. 93-106.
- 11) 『解剖』、213 頁。
- 12) この展開が、『時間様相の形而上学——現在・過去・未来とは何か』（勁草書房、2010 年）の著者、伊佐敷隆弘氏の仕事に多くを負っていることについては、『解剖』序論および平井論文注 44（202 頁）に記したとおりである。
- 13) なお、この論文の邦訳を担当した齋藤俊太氏は、哲学専攻の大学院生ではなく、機械学習の開発を担う会社に勤務されていることも付言しておきたい。
- 14) Alain Berthoz et Jean-Luc Petit (2006) *Phénoménologie et physiologie de*

- l'action*, Odile Jacob. (英訳 (2008) *The Physiology and Phenomenology of Action*, Oxford University Press). 英訳版では削除されている部分が多く注意が必要である。
- 15) Philippe Gallois et Gérard Forzy (eds.) (1997) *Bergson et les neurosciences*, Institut Synthélabo.
  - 16) 兼本浩祐 (2011) 『心はどこまで脳なのだろうか』医学書院、177 頁。
  - 17) Ioulia Podoroga (2014), *Penser en durée : Bergson au fil de ses images*, Editions L'Age d'Homme.
  - 18) Michael R. Kelly (ed.) (2010), *Bergson and Phenomenology*, Palgrave Macmillan.
  - 19) 最先端の論考を邦訳することも、簡単な仕事ではない。PBJ では次世代を担う若き研究者たちの協力を仰ぐことで、これを果たしている。とりまとめ役の岡嶋隆佑をはじめ、天野恵美理、原健一、田村康貴、齋藤俊太、持地秀紀、山根秀介、木山裕登の各氏が訳したものを、平井がチェックし、完成稿として仕上げたものである。彼らの献身的な努力なくしては、この論集は成り立っていない。
  - 20) ベルクソン『創造的進化』序論、ちくま学芸文庫（合田正人＋松井久訳）、14 頁。ただし訳文と強調は平井による。
  - 21) スプリット企画として、PBJ の後援により、2017 年 4 月に маниフェストの執筆者のひとりであるエリー・デューリングを招いて、新しい实在論をめぐるワークショップ「ハイパー時間」も開催した。千葉雅也（立命館大学）、近藤和敬（鹿児島大学）の両氏には特定質問を担当していただき、満員の会場で充実した議論が繰り広げられたことをここに記しておく。





## 第 1 部 読解の諸問題

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 1-1 潜在性とその虚像

ベルクソン『物質と記憶』における潜在性概念

村山達也

極度に難しいテキストを前にしたときに注釈者がなすべきことは、区別を増やすことである。テキスト自体はそうした区別を明確には設けておらず、示唆するにとどまっているときでさえ、むしろそうしたときにこそ、区別を増やさなくてはならない。

ドゥルーズ『ベルクソン哲学』（Deleuze 1966 : 59）

本稿の目的は、ベルクソン『物質と記憶』における潜在性（virtualité）概念の明確化という、ごくささやかなものである。そしてその結論も、いささか意気阻喪させかねないほどに地味なものである。『物質と記憶』における「潜在性」や「潜在的」といった語は、ごく一般的な哲学辞典や普通の辞書に記載されているとおりの意味をもっている、これが私の結論だからである。

なぜそのような、一見するとつまらない確認を行なうのか。それは第一に——形容詞での登場回数が最も多いのでそれを例にとると——、「潜在的」という形容詞それ自体は一般的な意味で用いられているのだとしても、何が、どのような文脈のなかでそう形容されているのかによって、当然ながら詳細な語義は変化しているからである。その詳細を確定しておくことは、一見そう思われるほどにつまらない作業ではない。実際ベルクソンは、かなり独自の議論のなかで、通常は潜在的と言われることのあまりないものを潜在的と呼んでおり、その結果として生じる語義は、ときとして、字面だけからは容易に予想しがたいものになっている。そうした語義のそれぞれを明確に規定しておくことは、上掲のエピグラフでドゥルーズも言うとおりの、難解をもって知られる『物質と記憶』の読解に寄与するところが大きいであろう。

しかしそれだけではない。ちょうどいま名前の拳がったドゥルーズに、ことは深く関わっている。

## 後書きおよび謝辞

本書『バルクソン『物質と記憶』を診断する——時間経験の哲学・意識の科学・美学・倫理学への展開』（以下『診断』と略記）は、平井靖史が代表を務める科学研究費助成研究「バルクソン『物質と記憶』の総合的研究——国際協働を型とする西洋哲学研究の確立」（課題番号 15H03154）が主催して、2016年11月10日・11日・13日に法政大学・明治大学・京都大学で行ったシンポジウム、「『物質と記憶』を診断する——バルクソンと脳・時間・記憶の諸問題」の報告論集である。3日間に行われた全12報告と、主として当日の特定質問者が書き下ろした7コラムを収録している。取められた報告には事後の加筆修正が施されているし、とくにコラムは後日に執筆されたものである。また、当日の報告は大部分が英語（一部が仏語）でなされており、本書が収めるのは、会場での配布用に若手研究者たちの尽力で準備され、その後、それを元に、平井が監修して成った日本語訳である。またさらに、本書での報告の掲載順は、当日の発表順を必ずしも踏襲していない。というわけで、本書はシンポジウム当日の正確な記録とは言いがたい面をもつ。ただまさにこうした編集の作業によって、本書の全体は、3日間のシンポジウムが達成したことを、その際の会場の熱気とともに、より濃密に、より正確に伝えるものになっていると編者らは信じるのである。

本書の内容をなす、肝心の、今回のシンポジウムがまさに達成したことについては、平井の「序」が意を尽くして語っていて贅言を要しない。すなわち、現代諸科学の知見を通じての『物質と記憶』の新たな読解、それが一言で言って、今回のシンポジウムが一貫して、しかも上首尾に行ないえたことであり、本書の内容もその読解の紹介から成り立っている。本書を一読した読者の皆さんには、平井の「序」に戻って、ここに含まれている多彩で複雑な意味の、今一度の整理を図っていただければと思う。平井も触れているように、今回のシンポジウムのこの成果は、同じ科研費チームが主催した前回

2015年のシンポジウム、『物質と記憶』を解剖する——ベルクソンと現代知覚理論・時間論・心の哲学』の成果を継承しており、また、本書自身も、2015年シンポジウムの報告論集『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する——現代知覚理論・時間論・心の哲学との接続』（平井靖史・藤田尚志・安孫子信編、書肆心水、2016年）（以下『解剖』と略記）をまさに継承している。

ただそうだとすると、ここで重要なことは、とはいえ、2016年シンポジウムと本書『診断』は、決して2015年シンポジウムと『解剖』の繰り返しではないということである。ベルクソンいわく、「時間の場合、重ね合わせの観念は背理を含む。なぜなら、それ自体に重ね合わされ、したがって測定可能になる持続の結果は、本質的に持続しないものであるから」<sup>1)</sup>。すなわち、たとえば、本書を、「拡張ベルクソン主義宣言、第二弾！」と呼ぶことも出来ようが、「拡張ベルクソン主義」なる語が、前回シンポジウムを通じて産み落とされたものであったとして（その事情については、平井の「序」を参照していただきたい）、今回シンポジウムはまさにこの語に導かれて生まれたと言えるのであって、先後関係は逆になっているのである。「拡張ベルクソン主義」は二つのシンポジウム、また『解剖』と『診断』とで、同じ意味を持つことはできないのである。事実、『物質と記憶』を同じく妥協なく現代科学（人工知能学、脳神経学、認知神経科学）と突き合わせつつ、『診断』は、この検討と矛盾を生じさせずに（むしろ共鳴させる仕方でも）、カント、ドゥルーズを語り、美学、倫理学を論じている。『解剖』のそれと比べると、『診断』の「拡張ベルクソン主義」にはすでに「言い表しがたい変化」<sup>2)</sup>が生じている。読者の皆さんにはむしろまさにその「変化」に留意していただければと思う。

この「変化」におそらく無縁ではないこととして、『解剖』（2016年）と『診断』（2017年）の間に生じた、研究周辺の諸事を、「序」で既述のものも含めて以下列記してみたい。①2015年の前回シンポジウム直後に、ポール＝アントワヌ・ミケルとエリー・デューリングによって、この研究への呼称として、「拡張ベルクソン主義」が提唱される。②「拡張ベルクソン主義」の宣言文も掲載した『解剖』は2017年の今現在、初刷をほぼ売りつくす状況にある。③『解剖』は2017年の今までに、公的に2本の書評（『週刊読書人』、『フランス哲学・思想研究』）で取り上げられている。④バリー・デイントンが『時間経験の哲学ハンドブック』（Routledge, 2017）で「ベルクソン」の一章の執筆を行った。⑤マイケル・R・ケリーから2018年のSPEP（現象

学実存主義学会)でベルクソンのパネルを組む誘いを受ける。⑥2015年シンポジウムで通訳を務めた宮原克典氏からの誘いで、平井が2017年のISTP(国際理論心理学会)で発表を行った。⑦2017年法政大学で行われたエリー・デューリングの講演会“Hypertime: An Inquiry into Time in itself”を当科研究費チームが後援した。諸事が入り混じり雑然とした記述となってしまったが、『解剖』以後、様々な場所に様々に脈略が通じて、「拡張ベルクソン主義」が「変化の絶えることのない勢い」<sup>3)</sup>と化しつつあることをご理解いただけたと思う。この「勢い」の先にこの『診断』はある。そして本書が、その「勢い」を固定させずに、あくまでも動きのままに伝えるものとなるよう、編者らはできる限り努めたのである。ただ果たしてそれに成功しているのか否か。その成否については、読者の皆さんの賢慮からのご判断の結果を待ちたいと思う。

以上のような研究の経緯、経過からして明らかなことであるが、本書がこうして出版されるに至るまでに、編者らは実に多くの方々からのご助力とご助言とを仰いできた。最後に、そのすべてに、ささやかながら、感謝の思いを申し述べたい。まずは科研究費メンバーの合田正人、檜垣立哉、杉村靖彦の三氏には、助力、助言というより、研究のまさに先導の役をこれまで一貫して果たしてきていただいた。また、シンポジウムでの、内外からの発表者の皆さん——バリー・デイントン、デイヴィッド・クレプス、カミーユ・リキエ、マイケル・R・ケリー、ユリア・ポドロガ、ジャン＝リュック・プチ、兼本浩祐、太田宏之、村山達也の諸氏——からいただいたご尽力が、われわれのこの仕事のまさに本体をなすものとなっていることは言うまでもない。さらに、シンポジウムでの諸発表の、不可欠な補助役を果たして下さった、三宅岳史、永野拓也、増田靖彦の三氏ら特定質問者の皆さん、通訳の清水将吾、石渡崇文の両氏、資料翻訳でお世話になった岡嶋隆佑、天野恵美理、原健一、田村康貴、齋藤俊太、持地秀紀、山根秀介、木山裕登の諸氏、また、シンポジウム後、本書の索引作業という繊細だが根気のいる作業を手伝ってもらった宮内孝啓、高尾純、廣岡健瑠、立津一樹の各氏にも、深甚の感謝の意を捧げたい。シンポジウムにいつも新鮮で魅力的なポスターを提供してくださっている伴野亜希子さんだが、本の趣旨を汲んだカバーデザインを、『解剖』に引き続きまた本書でもしていただいた。記して感謝に代えたい。シンポジウ

ムには直接関わらないが、現在準備中の『解剖』の英語出版のために「拡張ベルクソン主義宣言」の英訳を手掛けてくれたバリー・デイントン氏、またエリー・デューリング講演会で特定質問を引き受けてくれた近藤和敬、千葉雅也のお二人、また『解剖』の書評執筆の小関彩子、村松正隆の両氏にも、貴重なご協力を厚くお礼を申し上げたい。

最後となったが書肆心水の清藤洋氏からは、前書『解剖』に引き続き、本書『診断』においても、出版の万端で、それこそ筆舌に尽くせないご助力を賜った。「拡張ベルクソン主義」なる潮流が今日、日本の思想シーンで存在し始めているとすれば、それはひとえに清藤氏の温かくきびしい意思のお陰であると言いうると思う。

改めて、皆さん、本当にありがとうございました。

2017年9月

安孫子信 藤田尚志

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

注

- 1) Bergson, *La pensée et le mouvant*, PUF, pp. 2-3. (以下 PM と略記)。
- 2) Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF, p. 96.
- 3) PM, p. 8.

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 人名索引

カナ表記ブレは代表的なものにまとめた。欧文でも記されたものは併記した。欧文でのみ記されたものは人名索引最後の「欧文」の項に記載した。

### あ

アイシユタイン 110  
 アウグスティヌス 264, 317, 337,  
 353  
 アグラワル Agrawal, A. 217, 218,  
 222  
 浅野光紀 179  
 安孫子信 9, 17, 98, 179, 183, 249,  
 260  
 天野恵美理 18  
 アリストテレス 182, 260, 351  
 アンガー 164  
 アンデルセン Andersen, H. 142, 144  
  
 伊佐敷隆弘 17, 150, 179  
 石井敏夫 11, 34, 36  
 石渡崇文 17  
  
 ウィトゲンシュタイン Wittgenstein, L.  
 122  
 ウィリアムソン Williamson, T. 113,  
 114, 119  
 ヴェルニツケ 292  
 ヴォルフ 40, 73  
 ヴォルムス Worms, F. 10, 34, 35,  
 59, 80, 91, 97  
  
 エイヤー 351  
 エヴラン 41  
 エーデルマン Edelman, G. M. 247,  
 284, 287, 288, 292, 295-298  
 江川隆男 79, 81, 82  
 エクスナー 184  
 エッカート 234

大沢文夫 165  
 太田宏之 13, 15, 16, 182-184, 198,  
 225, 226, 249, 256, 257, 259, 262,  
 282  
 大庭健 351  
 岡嶋隆佑 17, 18, 180, 184  
 オキーフ O'Keefe, J. 266, 268, 270,  
 272, 274, 279, 282

### か

笠木丈 17  
 ガタリ 27  
 カナーレス Canales, J. 122, 145  
 金森修 82  
 ガニス 180, 184  
 兼本浩祐 14, 18, 165, 179, 184,  
 284, 295-300, 302  
 神山薫 33  
 カルナップ 190  
 ガロア 14, 18  
 河原温 15, 159, 304, 306-310, 316,  
 317, 320  
 神崎繁 180, 182  
 カンデル 281  
 カント Kant, I. 37, 38, 55, 56,  
 59-61, 80, 81, 87, 88, 92, 93, 122,  
 181, 272, 293, 327, 345, 350, 351  
 カントール 107  
  
 木田元 353  
 木山裕登 18  
 キャンベル 131  
  
 クーチュラ 41  
 クールノー 41



グッドウィン Goodwin, B 220, 223  
 グラスハイ 261  
 グラッシュ Grush, R. 142, 144, 145  
 クリプキ 122, 190  
 クレティアン Chrétien, J.-L. 72, 81  
 クレプス Kreps, D. 13, 186-190,  
 194, 196, 223  
 郡司ベギオ幸夫 179, 181

ケーシー Casey, E. S. 85, 97, 98  
 ゲーテ 151  
 ゲーデル 214  
 ゲシュビント 291, 292  
 ケリー 142  
 ケリー Kelly, M. R. 15, 17, 18, 249,  
 260, 326, 350, 354

合田正人 17  
 河野哲也 172, 180  
 コースガード Korsgaard, C. 15, 327  
 -334, 336, 341, 344, 345, 350,  
 352  
 ゴールドシャイダー 135, 261  
 ゴールドシュタイン Goldstein, K. 233  
 コールマン Coleman, S. 149, 164,  
 179  
 國領佳樹 33  
 小杉将誠 17  
 コスリン 180, 184  
 コツホ Koch, Ch. 161  
 小林卓也 12  
 ゴフ Goff, Ph. 164, 179  
 コホネン Kohonen, T. 240, 246,  
 248  
 コロンブス 75  
 近藤和敬 18

## さ

サール Searle, J. 210, 223  
 齋藤俊太 17, 18  
 佐藤愛 17  
 サリス Sallis, J. 91, 92, 97

シェイクスピア 151, 261  
 ジェイムズ James, W. 126, 127,  
 140-144, 146, 149, 150, 152, 153,  
 163, 164  
 ジェファークソン Jefferson, G. 214,  
 223  
 シェリング 66  
 シバルタン＝ブラン 151  
 清水将吾 15, 17, 154  
 シャナハン 218  
 ジャンケレヴィッチ Jankelevitch, V.  
 59, 80, 89, 345, 349, 355  
 ジャンヌロー 263  
 シュテルン Stern L. 138, 147, 152  
 シュバリエ Chevalier, J. 44, 58,  
 323, 325  
 ショーベンハウアー 66, 70, 149

杉村靖彦 17  
 杉山直樹 163, 180, 182  
 スタンジェール Stengers, I. 213, 223  
 スタンリー Stanley, J. 113-115, 119  
 スチュアート 142  
 スティーブンソン 351  
 ストローソン Strawson, G. 127,  
 147, 149, 150, 161  
 スノウドン Snowdon, P. 131, 132,  
 147  
 スピノザ 50

ゼノン 10, 42, 107, 111

## た

田中敏彦 159  
 ダマシオ 268  
 田村康貴 18, 33  
 ダメット 122

チェックランド Checkland, P. 201,  
 202, 222  
 千葉雅也 18  
 チャーマーズ Chalmers, D. 122,  
 123, 145, 148, 161, 164, 179

チューリング Turing, A. 190, 197,  
202, 209-215, 224  
 チョムスキー 122  
 デイントン Dainton, B. 12, 15, 17,  
122, 135, 145, 148-152, 155, 159,  
161, 162, 164, 168, 173, 179, 182  
-184, 249-254, 259-261  
 デカルト 11, 43-47, 49, 76, 77, 210,  
216, 253, 254, 268  
 デデキント 107  
 デネット Dennett, D. 14, 137, 146,  
185, 209, 222  
 デューリング 17, 18, 59, 180, 183,  
260  
 デリダ 316, 318  
 ドウ・ヴァール 350  
 ドゥルーズ Deleuze, G. 10-12, 17,  
20-25, 27, 30-35, 37, 59, 72, 78-  
82, 86, 110, 111, 122, 293, 295,  
324, 325, 335, 353  
 トールマン Tolman, E. C. 268, 279,  
282  
 トノーニ Tonini, G. 180, 182, 295  
 ドルボー Dolbeault, J. 161, 179, 261  
 トロティニョン 80  
 トンプソン 180, 184

## な

永野拓也 13, 17, 186  
 中原真祐子 17, 285  
 ナンシー Nancy, J.-L. 306-310, 316,  
317  
 ニーチェ 122  
 ニュートン 54  
 ネーゲル Nagel, T. 161, 216, 223  
 野家啓一 353

## は

バークリー 50  
 バーレン 309  
 ハイデガー 75, 316  
 バシュラール Bachelard, G. 85, 97,  
98, 242, 248  
 ハッキング Hacking, I. 194  
 バトナム 122  
 バトラー 94  
 パヌロ Panero, A. 60, 80  
 バベッジ 202  
 ハミルトン 142  
 原健一 18, 33  
 バルテルミ＝マドール 37, 59, 73, 80  
 檜垣立哉 11, 12, 17, 99, 322, 323  
 ビカソ 214  
 ビッツ Pitts, W. 227-229, 232-238,  
246, 248  
 ヒューム 122, 285, 345, 351, 355  
 ビヨン 143  
 平井靖史 13, 17, 58, 98, 154, 159,  
160, 179, 181, 183, 184, 186, 208,  
217, 225, 249, 260, 281, 285, 294  
 ヒントン Hinton, G. 198, 200, 223  
 ヒントン Hinton, J. M. 132, 146  
 ファインスタイン 206  
 ファインマン Feynman, R. 220, 222  
 ファラデー Faraday, M. 54, 124, 148  
 フィッシュ Fish, W. 151, 260  
 フィヒテ 66  
 フィロネンコ Philonenko, A. 37, 60,  
79, 80  
 プーレ 313  
 フェヒナー 194  
 フォード Ford, K. 209, 223  
 フォン・ノイマン 14, 202, 228, 229,  
232-236, 246, 248  
 福島邦彦 247  
 プシチャリ 54  
 藤田尚志 9, 11, 17, 58, 83, 96, 98,  
179, 183, 249, 260

プチ 14, 17, 217, 225, 263, 281  
 プチト 281  
 フッサール Husserl, E. 92, 142,  
 181, 353  
 ブラウン 142  
 プラトン 122, 260, 285, 348, 351,  
 355  
 フランクファート Frankfurt, H. G.  
 330, 351, 354  
 プリゴジン Prigogine, I. 213, 223  
 ブリュエア 131  
 プリングスジョード 216  
 プルキニエ 151  
 プレンターノ 138  
 フロイト Freud, S. 72, 284, 285,  
 287, 288, 292, 296-298  
 ブロック Block, N. 210, 222  
 プロティノス 15, 157, 159  
 フロリディ Floridi, L. 209, 222  
 ヘイズ Hayes, P. 209, 223  
 ベイン 285  
 ヘーゲル 60, 143, 306  
 ペギー 75  
 ヘップ Hebb, D. O. 268, 279, 282  
 ベネカン, D. 281  
 ベルトーズ Berthoz, A. 14, 17, 263,  
 279, 281  
 ヘルムホルツ Helmholtz, H. 151  
 ペンローズ 161

ポアンカレ 192, 194  
 ホジソン 142, 143  
 ポドロガ Podoroga, I. 15, 18, 156,  
 159, 304, 318, 319, 321, 322  
 ポパー 122

## ま

マーティン 131  
 マールブランシュ 46  
 マイネルト 284, 285, 287, 292, 296  
 -298  
 マカロック McCulloch, W. 227-229,

232-238, 246, 248  
 マクスウェル 54  
 マクダウェル McDowell, J. 131,  
 132, 146  
 マスク 219  
 増田靖彦 15, 17, 321  
 松井久 17  
 マックレランド McClelland, J. L.  
 236, 246  
 マッスイミーニ Massimini, M. 180,  
 182  
 マツハ 164  
 マラーキー Mullarky, J. 34, 35  
 マリオン 76  
 マルクス 122  
 マルコフ Markoff, J. 199, 223  
 ミケル 17, 180, 260  
 水地宗明 159  
 ミチョット Michotte, A. 126, 146  
 港千尋 297  
 三宅岳史 14, 17, 285, 296  
 ミュラー 135, 151, 261  
 ミンスキー Minsky, M. 228, 236, 246

村田淳一 353  
 村山達也 12, 17, 20, 80, 112, 285

メイエル=ビシュ 54  
 メイヤスー Meillassoux, Q. 111

モークリー 234  
 モーザー Moser, E. I. 266, 270-272,  
 279  
 モーザー Moser, M.-B. 266,  
 270-272, 279  
 持地秀紀 18, 159  
 モリエール 33

## や

山内翔太 180, 185  
 やまだようこ 300  
 山鳥重 180, 185

山根秀介 18

横山幹子 260

## ら

ライプニッツ 46, 47, 123, 124, 129,  
130, 148, 149, 163, 190

ライル Ryle, G. 12, 112-119

ラヴジョイ Lovejoy, A. 143, 144, 146

ラカン 72

ラッセル Russell, B. 122, 147, 148,  
164

ラプラス 213, 216

ラメルハート Rumelhart, D. E. 236,  
246

リード 142

リード 297

リキエ Riquir, C. 11, 37, 58-60, 79  
-82, 97, 285, 351

リヒトハイム 292

リベット Libet, B. 181, 202,  
206-208, 216, 220, 223

ルイス 122

ルヌヴィエ Renouvier, C. B. 41,  
143, 144, 146, 152

レットヴィン 286

ロウラー Lawlor, L. 334, 352, 355

ロウロフス Roelofs, L. 130, 146

ローゼンバーグ Rosenberg, G. 130,  
146, 150

ローゼンブラット Rosenblatt, F.  
236, 246

ロック 285

ロビンズ 161, 180

## わ

鷺田清一 353

ング 199, 200, 225

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

欧 文

Anderson, H. 145  
 Ansell-Pearson, K. 34  
 Arnsten, A. F. T. 246  
 Arntzenius F. 145  
 Arstila, V. 167, 179, 180  
 Aspuru-Guzik, A. 223  
 Babbush, R. 223  
 Barends, R. 223  
 Barnes, C. A. 279  
 Bello, P. 222  
 Benrubi, Isaac 325  
 Berger, T. 246  
 Bhaskar, M. 217, 218, 222  
 Bouton, Ch. 179, 181  
 Bowles, N. 219, 222  
 Brennan, A. 246  
 Bringsjord, S. 222  
 Bruntrup, G. 179  
 Buren, D. 318  
 Burgess, N. 279, 282  
 Buzsáki, G. 279, 282  
 Byrne, A. 145  
 Cacucci, F. 279  
 Campbell, B. 223  
 Čapek, M. 145  
 Catani, M. 295  
 Chen, Y. 223  
 Chen, Z. 223  
 Chiaro, B. 223  
 Coveney, P. V. 223  
 Czarnecki, B. 119  
 De Fauw, J. 218, 222  
 Dewey, C. 217, 222  
 Ding, N. 223  
 Dostrovsky, J. 279, 282  
 Dragoi, G. 279, 282  
 Dudley, A. 246  
 Dunsworth, A. 223  
 Duque, A. 246  
 Ferrucci, D. 222  
 Fowler, A. G. 223  
 Freeman, A. 149, 179

Fyhn, M. 279  
 Fytche, D. H. 295  
 Gans, J. 222  
 Goldfarb, A. 222  
 Gross, C. G. 295  
 Hafting, T. 279, 282  
 Hern, A. 218, 219, 223  
 Hof, R. 218, 223  
 Izhikevich, E. M. 246  
 James, H. J. 146, 152  
 Jaskolla, L. 179  
 Jeffrey, E. 223  
 Keane, P. 222  
 Kelly, J. 223  
 Kivlichan, I. D. 223  
 Konkel, F. 223  
 Lee, A. K. 279  
 Lefebvre, A. 351, 355  
 Lever, C. 279  
 Logue, H. 145  
 Love, P. J. 223  
 Lucero, E. 223  
 Lüscher, H.-R. 246  
 Lycan 149  
 Magee, J. C. 246  
 Martinis, J. M. 223  
 Mazer, J. A. 246  
 McClean, J. R. 223  
 McCormick, D. A. 246  
 McGinn 149  
 McNaughton, B. L. 279  
 Megrant, A. 223  
 Mehta, M. R. 279, 282  
 Molden, S. 279  
 Mölder M. 180  
 Moore, A. W. 34  
 Morch, H. H. 146  
 Muller, R. U. 279  
 Mutus, J. Y. 223  
 Myers, G. E. 146  
 Neeley, M. 223  
 Neill, C. 223  
 Neven, H. 223  
 Nou, E. 246

O'Malley, P. J. J. 220, 223, 224  
Øhrstrøm, P 180  
Palmer, N. M. 261  
Palmer, W. S. 350  
Paspalas, C. D. 246  
Paul, N. M. 261, 350  
Pavese, C. 119  
Perry 147  
Pylyshyn, Z. W. 180, 184, 194  
Quintana, C. 223  
Ramos, B. P. 246  
Ranck, J. B. 279  
Recce, M. L. 279, 282  
Romero, J. 224  
Roushan, P. 223  
Sank, D. 223  
Senn, W. 246  
Seymour, P. 246  
Shannon, C. 246  
Shu, Y. 246  
Siegel, S. 147, 151  
Simen, A. 246  
Sinclair, M. 34  
Skaggs, W. E. 279, 282  
Smith, A. D. 151

Solon, O. 217, 224  
Soteriou, M. 151  
Speakman, A. 279, 282  
Stewart, S. 318  
Stuart, G. J. 246  
Symons 149  
Taddeo, M. 222  
Taube, J. R. 279, 282  
Tomasev, N. 222  
Tranter, A. 223  
Turilli, M. 222  
Vainsencher, A. 223  
Vijayraghavan, S. 246  
Wahl, J. 153  
Wang, M. 246  
Webster, V. 220, 224  
Wegner, D. 207, 224  
Wenner, J. 223  
White, T. C. 223  
Williams, S. R. 246  
Wills, T. J. 279, 282  
Wilson, M. A. 279  
Wong, S. 218, 224  
Wordsworth, W. 318

SAMPLE  
Shoshi-Shinsei.com

## 事項索引

カナ表記ブレは代表的なものにまとめた。

### あ

圧縮 169, 170, 226, 240, 241, 249,  
259, 262, 274, 275

アトラクター 13, 188-193

アフオーダンス 297

アンチノミー 37, 39-43, 51, 52, 54,  
56, 59, 63, 65, 66, 68, 71, 74, 75

意識の科学 226, 228, 239, 258

意識の流れ → 「流れ経験」も見よ  
12, 137, 141, 144, 149, 151

異質性 (的) 69, 88, 101, 167, 168,  
172, 275, 319, 323

位相相関・位相同期 273, 274

一元論 → 「中立一元論」も見よ 101,  
103, 106, 110, 161

一緒性 125

一般観念 117, 344

イミテーション・ゲーム 210, 211,  
214, 215

意味論 114

ウォントン → 「奔放」も見よ 330,  
342, 351, 354

宇宙論 39, 40, 43, 50, 63, 68, 74,  
75

運河 84

運動図式 → 「図式」「動的図式」も見  
よ 90, 94, 174, 176, 177, 185,  
300

映画モデル 151

英米系 131, 216

A理論 → 「時制理論」も見よ 13,  
163

エナクト 257, 340

エピソード記憶 14, 265, 272, 275,  
276

エポケー 47

エラン・ヴィタル 86, 108, 230, 335,  
347, 349

エレフォン 94

遠隔的過去 162, 175

延長 → 「広がり」も見よ 44, 45,  
53, 54, 91, 160, 275

延長主義 (モデル) 12, 138-142,  
151, 152, 162, 167, 168

エントロピー 187

オートマトン 236

オーバーラップ (説) 137, 139-142,  
183

おばあさん細胞 286, 287

### か

回想 → 「想起」を見よ

概念論 10

海馬 14

カオス 13, 122, 188, 189

学習 13, 201, 202, 205, 206, 208,  
209, 215, 221, 225, 242, 344

拡張ベルクソン主義 10, 15, 17

確率論 189, 213, 236

過去把持 337, 353

可能性 (的) 23, 24, 26-28, 30-33,  
36, 43, 60, 62, 74, 148, 285

間隔化 91, 92, 307, 309, 315, 316,  
318

感覚質 → 「クオリア」も見よ 163-  
165, 168-170, 172, 173, 176, 177,  
183, 184, 244

還元 13, 81, 104, 114, 144, 161,

164, 258, 266, 296, 317  
 感性的直観 38, 63, 64, 67, 74, 88, 89  
 観念論 43, 44, 46-50, 80, 99, 153, 154, 253  
 完了(相) 150, 160, 162, 163, 176, 177, 182, 186, 187, 190  
 記憶喪失 265  
 機械学習 17, 196, 198, 200, 225  
 機械論 44  
 技術知(技能知) 12, 112-117  
 機能的知覚 175, 176  
 逆円錐(図) 15, 90, 100, 101, 106, 284, 288, 293, 294, 342, 347  
 共意識 125, 127-130, 142, 149, 150  
 凝縮 →「収縮」「縮約」も見よ 13, 16, 27, 92, 101, 170, 172, 176, 177, 181, 182, 184, 208, 262, 263, 276, 288, 293, 294, 340  
 局在論(説) 10, 85, 265, 292, 296, 338  
 緊張 54, 90, 91, 96, 167, 276, 319, 341, 342  
 空間 10, 27, 44, 45, 53-56, 64, 66, 68-70, 75, 81, 85, 88, 91, 95, 98, 153, 192, 217, 226, 229, 239-241, 258, 263, 264, 266-273, 275, 281, 301, 302, 306-309, 312, 315, 318, 319, 334, 344  
 空想 93, 347  
 クオリア →「感覚質」も見よ 163, 164, 170, 171, 174-177, 182, 184  
 組み合わせ問題 163, 182  
 クロック 14, 226, 227, 229, 233, 235, 237, 248, 257  
 経験論 →「高次の経験論」も見よ 39, 50-52, 56, 68, 81, 99, 100, 103-105  
 形而上学 →「実証的形而上学」も見よ 9, 37-40, 42, 43, 49-51, 54, 59-64,

67-69, 71-74, 77, 98, 100-104, 106, 108, 110, 117, 123, 124, 217, 255, 256, 258, 259, 265, 309, 323, 337, 339  
 芸術論 15  
 幻影 134  
 幻覚・幻想 93, 131-133, 135, 150, 151, 155, 174, 207, 250-254, 260  
 現在主義 10, 169  
 現在の記憶 313, 319  
 現象学 14, 110, 353  
 現象的意識 163  
 現象的イメージ 13, 160  
 現前化 309, 316, 317  
 現働的(化)・現実的(化) 29, 32, 33, 35, 36, 80, 82, 84, 89, 91, 93, 94, 106, 107, 150, 156, 158, 293, 294  
 格子ニューロン(細胞) 266, 267, 271, 272  
 高次の経験論 →「経験論」も見よ 39, 40, 43  
 構成論的アプローチ 10  
 構造主義 72  
 功利性(的)・有用性(的) 54, 56, 89, 95, 102, 103, 106, 107, 177, 252, 258, 259, 304, 306, 333, 341, 347, 348, 354  
 心の哲学 15, 159, 181, 259  
 誤謬推論 37, 39, 41, 43, 45-49, 59, 63, 66, 68, 75, 78  
 痕跡 175, 275, 294, 309, 310  
 さ  
 再認 9, 92, 175, 203-205, 221, 311  
 錯覚・錯視 81, 132, 133, 136, 150, 152, 173, 175, 250, 252-254  
 散逸構造 13, 186, 188-191, 193, 220, 221  
 思惟 44-46, 66, 74  
 弛緩 167, 190, 342



- 時間意識 142, 151, 152, 256  
 時間経験 12, 15, 137, 141, 152, 249, 305, 311  
 時間スケール 150, 162, 164, 167, 169-172, 184, 226, 229, 230, 237, 239-241, 248, 262, 274-276  
 時間存在論 9, 159, 173, 275  
 時間単位 13, 161, 162, 165, 166, 168-170, 184, 239  
 時間的延長 12, 137, 138, 150-152, 160, 162, 165-167, 169, 170, 172, 181, 184, 186, 238, 353  
 時間論 10, 13, 161, 183, 227, 321  
 志向性(的) 149, 160, 176  
 自己組織化マップ(SOM) 184, 240-242, 248  
 システム 13, 105, 108, 161, 162, 166-171, 175, 176, 181, 184-189, 193, 197, 201, 210, 219, 220, 234, 263, 267, 270  
 システム論 9, 160, 181  
 時制 163  
 時制理論 13  
 自然主義 14, 160, 161, 181, 265  
 自然法則 162, 333  
 失行 9  
 実効性(的) 83, 84, 89, 94, 95, 127  
 失語症 9, 14, 29, 45, 265, 292, 296  
 実在論 →「直接実在論」も見よ 10, 18, 43, 44, 46-50, 89, 101, 111, 253, 276  
 実証の形而上学 →「形而上学」も見よ 16, 72, 82, 117  
 失認 →「精神盲」も見よ 9, 14, 284, 289, 298  
 質料(素材) 69, 134, 154-158, 161, 168, 174, 181, 189, 313  
 自動的再認 173, 174, 176  
 自動保存 174, 257, 339  
 自発性 144, 166, 266, 267, 277  
 写真 148, 182, 196, 199, 218  
 自由 52, 62, 83-85, 87, 93, 144, 167, 177, 207, 208, 244, 248, 262, 269, 315, 326, 328, 332-336, 345, 348, 349, 351  
 集合論 111, 188, 189, 191, 314  
 収縮 →「凝縮」「縮約」も見よ 87, 101, 106, 110, 180  
 縮約 →「凝縮」「収縮」も見よ 14, 229, 240-243, 262  
 受動意識 167  
 純粹記憶 23, 29, 85, 94-96, 100, 104, 105, 107, 108, 163, 217, 253, 264, 265, 298-300, 332, 335, 336, 341, 343, 352, 354  
 純粹持続 14, 244, 245  
 純粹知覚 49, 91, 99-101, 253, 261, 305, 332, 333, 335, 352, 353  
 止揚 60, 66, 67  
 情動主義 345, 347, 351  
 情報 14, 103, 169, 170, 175, 176, 183, 197, 201, 206, 209, 221, 233, 239, 241, 244  
 進化(論) 9, 81, 110, 165, 329, 339, 352  
 神学 40, 63, 68, 74, 75  
 神経科学 →「脳科学」も見よ 10, 12, 14, 131, 132, 161, 181, 197, 198, 202, 206, 226-232, 236, 243, 244, 248, 256-259, 263, 264, 266, 275, 285, 291, 293  
 神経系 9, 84, 187, 189, 227, 230, 240, 244, 266, 340  
 神経心理学 185  
 神経ダーウィニズム 297  
 人工知能 10, 13, 196, 201, 209, 211, 216, 217, 219, 221, 228, 237  
 心身問題・心身結合(合一) 9-11, 13, 14, 44-47, 50, 76, 77, 99, 100, 102-104, 106, 108, 118, 123, 157, 181, 275, 296  
 深層学習 →「ディープラーニング」も見よ 196-198, 200, 205, 209, 218, 220, 225  
 身体記憶(運動記憶・習慣記憶) 14, 185, 204, 205, 219, 242, 253, 264, 272, 284, 296, 278, 332, 335, 337,

339-343, 352  
 心的回転 173  
 心脳問題 230  
 心理学 39, 40, 45, 50, 63, 68, 69,  
 74, 75, 77, 82, 85, 110, 131, 138,  
 139, 142, 151, 161, 205, 227, 230,  
 258, 259, 264, 265, 295, 336, 339,  
 350  
 推移性(的) 128, 130, 150, 174,  
 188  
 随伴(付随)現象(説) 10, 48, 162,  
 207  
 図式(論) →「運動図式」「動的図式」  
 も見よ 11, 51-53, 63, 64, 70, 77,  
 78, 83, 86-93, 95, 192  
 スピリチュアリズム 264, 266  
 性格 10, 15, 328, 332, 339, 341,  
 343, 346, 354  
 生氣論 84, 230, 293  
 精神医学 10, 14  
 精神物理学 230  
 精神盲 →「失認」も見よ 284, 285,  
 289  
 生態学 9, 10, 170  
 成長ブロック(宇宙)説 183  
 生物学 85, 130, 167, 183, 189, 198,  
 206, 220, 263, 268, 275  
 生への注意 93, 94, 96, 314, 315,  
 321, 326, 328, 332-336, 339-341,  
 343, 347, 348, 350  
 生命 23, 82, 83, 85, 94, 108, 181,  
 189, 191, 193, 213, 220, 255, 263  
 -265, 276, 305  
 生理学 14, 16, 85, 151, 161, 184,  
 230, 263, 285, 334, 335  
 sesmet 149  
 選言主義(説) 13, 130-133, 136,  
 151, 250, 260  
 潜在性(的) 20-33, 35, 36, 41, 73,  
 80, 82, 83, 94, 108, 160, 209, 220,  
 227, 285, 287, 288, 292, 294  
 全体的経験 74

全体論 125, 170, 181  
 想起(回想) 33, 96, 100, 102, 104  
 -106, 108, 117, 174, 204-206,  
 298, 353, 355  
 相互浸透 152, 192, 312, 314, 319  
 創造 23, 24, 31-33, 35, 85, 122,  
 140, 161, 191, 215, 216, 242, 262,  
 304, 307, 309, 310, 322, 351, 355  
 想像力(構想力) 53, 78, 82, 89, 91  
 -93, 98, 174, 252, 315  
 相対性理論(相対論) 110, 161  
 創発 13, 160, 161, 181  
 創発主義 161  
 走馬燈 156, 157, 312, 313, 315-317  
 存在論 13, 21, 40, 68, 73, 74, 81,  
 82, 89, 94, 103, 104, 106, 107,  
 132, 161, 250-252, 275, 276, 309,  
 322  
 ゾンビ 173  
 た  
 体性感覚 169, 183, 281  
 ダイナミック・スナップショット説  
 167  
 大陸系 10, 249  
 多元論 13, 14, 16, 143, 161, 169,  
 177  
 単純説 167  
 遅延 →「反応遅延」も見よ 13, 167,  
 168, 176, 177, 182, 207, 208, 228,  
 229, 233-237, 241, 248, 339  
 知覚理論(の哲学) 9-13, 17, 26-28,  
 30, 98, 130, 154, 159, 181, 250,  
 251, 253, 254  
 知性 38, 39, 53, 63, 93, 201, 216,  
 221, 345, 346, 351  
 注意的再認 173, 175, 176  
 中立一元論 152, 179  
 超越論的感性論 55, 63, 65, 67-70,  
 76, 88  
 超越論的分析論 63-65, 67, 69-71,

78  
 超越論的弁証論 38, 40, 43, 63-65,  
 67, 70-73  
 直接实在論 →「实在論」も見よ 13,  
 130-133, 136, 148, 150, 151, 249  
 -254, 260, 261  
 直観 30, 38-43, 50, 51, 53, 54, 56,  
 59, 62-72, 74, 82, 88, 89, 92, 99,  
 110, 208, 321, 324  
  
 ディープラーニング →「深層学習」も  
 見よ 187, 190, 228, 242  
 デカップリング 165  
 出来事 13, 126, 207, 265-267, 270,  
 272, 274, 275, 277, 282, 307, 313,  
 318, 321, 337, 340, 352  
 デジャヴュ 312, 313, 315, 317, 319  
 手続き型知覚 173  
 同期 14, 182, 226-229, 231, 233,  
 236, 237, 239, 245, 248, 257, 273,  
 275  
 統合情報理論 183  
 同時性(的) 207, 227, 315  
 等質的 52, 53, 69, 165, 169, 172,  
 184, 263, 301  
 投射(投影) 135, 137, 176, 182,  
 184, 271, 272, 353  
 動的(力動的)図式 →「図式」「運動  
 図式」も見よ 84, 85, 90, 300, 301  
 道徳性 15, 326, 327, 329, 346, 350  
 独断論 50-52, 56

## な

内観 31, 125  
 流れ経験 →「意識の流れ」も見よ  
 172, 184, 312  
  
 二階の意欲(欲求) 15, 343-346, 351  
 二元論 10, 44, 45, 47, 103, 106,  
 110, 118, 184, 189, 231, 244, 253,  
 254, 261, 275  
 二重知覚(再認)説 →「ハイブリッド

説(知覚・再認)」も見よ 9, 13,  
 159, 173  
 ニューラルネットワーク 198-202,  
 206, 218, 225, 237, 240  
 認識論 11, 40, 74, 82, 242, 260  
 認知科学 10, 115, 131, 173, 263  
 認知神経科学 14  
 認知心理学 185  
 認知地図 14, 266-270, 272, 273  
  
 ネオコグニトロン 242  
 ネオプラトニズム 158  
  
 脳科学 →「神経科学」も見よ 103,  
 110, 167, 239, 296, 298

## は

パーセプトロン 236  
 ハード・プロブレム 173  
 バイアス 217  
 ハイブリッド成長宇宙説 13, 173  
 ハイブリッド説(知覚・再認) 133,  
 136, 137, 151, 155, 159, 173, 252,  
 254, 255, 261  
 把持主義 12, 138-140, 151, 182  
 場所(論) 11, 27, 85-87, 90, 94,  
 95, 98  
 場所ニューロン(細胞) 14, 266-274,  
 276  
 バックプロパゲーション 236, 242,  
 243  
 パラドックス 10, 42, 56, 107, 215,  
 309  
 パラメータ 188, 225  
 汎経験主義 148  
 汎質主義(論) 13, 160, 163, 164,  
 181, 182, 185  
 汎心論 123, 125-130, 138, 148,  
 150, 161, 163, 181, 249, 255, 261  
 反応遅延 →「遅延」も見よ 13, 167,  
 208, 262  
  
 B理論 13, 163

美学 12, 315  
 非線形 188, 189  
 非線形の遅延差説 167, 168  
 日付 16, 95, 112, 115-117, 307-310,  
 316-318, 340  
 非物質 169, 170, 172, 174, 175  
 憑在論 82, 83, 87, 89, 94, 98  
 表象 12, 46-48, 68, 70, 93, 149,  
 160, 174, 185, 226-230, 240, 244,  
 245, 248, 251, 253, 263, 266, 268,  
 270, 271, 287-289, 293, 296, 297,  
 300, 306, 315, 330, 334, 344, 346,  
 353  
 広がり(拡がり) →「延長」も見よ  
 54, 107, 272, 307, 309  
  
 フィクション 191, 212  
 不確定性(非決定性) 134, 166, 167,  
 177, 267, 333-336, 339  
 複雑系 190, 197, 213  
 複雑性 13, 197, 334  
 付随現象 →「随伴現象」を見よ  
 物理主義 →「唯物論」も見よ 110,  
 164  
 プランク時間 182  
 分散表象 229, 236, 237  
 分析系(哲学) 10, 12, 122, 148,  
 249, 253, 254, 259  
  
 並行論(心身並行論) 82  
 閉鎖系 299-301  
 ベーシック・インカム 219  
 閉包性 162, 174  
 弁証法 38, 42, 62  
  
 ボアンカレ写像 191  
 崩壊 327, 332, 334, 337, 339, 345,  
 346  
 方法論 11, 21, 89, 99, 102, 104,  
 110, 322-324  
 ポストディクシオン 168  
 ホムンクルス 226, 244, 272  
 ホログラフィック 123, 124, 129,  
 130

本性の差異 21, 69, 104-106, 148,  
 183, 255  
 奔放 →「ウオントン」も見よ  
 342-345, 347, 349, 351  
  
**ま**  
  
 マルコフ連鎖(性) 167, 227, 238  
  
 見かけの現在 12, 150  
 未完了(相) 96, 162, 163, 167,  
 172, 176, 182, 186, 187  
 未来 83, 85, 96, 143, 156, 163,  
 174, 181, 182, 188, 208, 209, 213,  
 216, 221, 249, 305, 308-313, 315  
 -317, 319, 334  
 未来予持 353  
  
 無為 85, 87, 94-96  
 無意識 29, 36, 94, 124, 135, 148,  
 155, 157, 230  
 夢想 →「夢」も見よ 95, 107, 312,  
 344, 348  
 無力 29, 36, 85, 87, 94  
  
 命題知 12, 112-117  
  
 盲視 174  
 目的論 84, 96, 327, 330-334,  
 340-343, 345, 347, 348, 352, 354  
 モナド 124  
 物自体 46-48, 52, 53, 74, 85, 89,  
 255  
  
**や**  
  
 唯心論 50  
 唯物論 →「物理主義」も見よ 10,  
 48, 50, 123, 154, 240, 258  
 唯名論 10  
 有用性 →「功利性」を見よ  
 夢 95, 112, 122, 133-136, 151,  
 155-157, 159, 174, 254, 264, 287,  
 313, 314, 328, 332, 340-349, 354

抑制系（性） 16, 232, 240-244,  
248, 263  
予見 23, 163, 261  
予見不可能性 23, 24, 83, 171, 191,  
312

## ら

力動論 44  
リズム 54, 86, 87, 93, 101, 162,  
172, 274-276, 322

離断仮説 291  
流動主義 163  
量子コンピューティング 220

連合主義 10, 285-287, 291, 292

ロボティクス 218

## わ

ワーキングメモリ 238

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

●著者紹介（掲載順）

村山達也（むらやま・たつや） 東北大学・准教授。近現代フランス哲学・倫理学。  
“Portrait de famille? — Bergson et le dernier Wittgenstein”, in F. Worms (éd.),  
*Annales bergsoniennes V*, PUF, 2012. 「明証性と価値判断——デカルトの倫理学  
をめぐる」(座小田豊編『自然観の変遷と人間の運命』東北大学出版会、2015年)。

カミーユ・リキエ (Camille Riquier) パリ・カトリック学院・准教授。現象学、  
19-20世紀フランス哲学。1974年生。*Archéologie de Bergson* (PUF, 2009), *Philo-  
sophie de Péguy* (PUF, 2017)。

榎垣立哉（ひがき・たつや） 大阪大学人間科学研究科・教授。現代フランス哲学、日  
本哲学。1964年生。『日本哲学原論序説』(人文書院、2015年)、訳書にジル・ドゥ  
ルーズ『ベルクソンの哲学』(小林卓也共訳、勁草書房、2017年)。

バリー・デイントン (Barry Dainton) リバプール大学・教授。形而上学、心・意  
識・自己の哲学。1958年生。*Phenomenal Self* (Oxford University Press, 2008),  
*Time and Space* (Routledge, 2nd edition 2010), “Bergson on temporal experi-  
ence and durée réelle” in Ian Phillips, *The Routledge Handbook of Philosophy  
of Temporal Experience* (Routledge, 2017)。

清水将吾（しみず・しょうご） 日本大学文理学部人文科学研究科・研究員。空間論、  
知覚の哲学、哲学対話。1978年生。「モリニュー問題へのカント的応答と形体知覚の  
現象論」(『精神科学』第55号、日本大学哲学研究室編、2017年)、“The Body as  
the Zero Point”, *The Journal of the British Society for Phenomenology*, Vol. 42,  
No. 3, 2011.

永野拓也（ながの・たくや） 熊本高等専門学校熊本キャンパス共通教育科・教授。フ  
ランス哲学（ベルクソン哲学）。1967年生。『ベルクソンにおける知性的認識と実在  
性』(北樹出版、2011年)、「ベルクソンと特殊相対性理論」(金森修編『合理性の考  
古学——フランスの科学思想史』東京大学出版会、2012年)。

デイヴィッド・クレプス (David Kreps) サルフォード大学・上級講師。情報シス  
テムの哲学。1963年生。*Bergson, Complexity and Creative Emergence* (Palgrave,  
2015), *Gramsci and Foucault: A Reassessment* (ed. Routledge, 2015), *Tech-  
nology and Intimacy: Choice or Coercion* (co-edited with G. Fletcher and M.  
Griffiths, Springer 2016)。

太田宏之（おおた・ひろゆき） 防衛医科大学校医学教育部生理学講座・助教。神経生

理学。1976年生。“Reevaluation of McCulloch-Pitts-von Neumann’s clock”, *BioSystems* 127, (2014), Hiroyuki Ohta et al., “Adrenergic receptor-mediated modulation of striatal firing patterns”, *Neuroscience Research* 112, (2016).

マイケル・R・ケリー (Michael R. Kelly) サンディエゴ大学助教授。現象学。*Phenomenology and the Problem of Time* (Palgrave Macmillan, 2016), *Bergson and Phenomenology* (Palgrave Macmillan, 2010).

ジャン＝リュック・プチ (Jean-Luc Petit) ストラスブール大学名誉教授。現象学・フッサール研究・認知科学。1944年生。“Pathological Experience : A Challenge for Transcendental Constitution Theory?” In G. d’Oro and S. Overgaard, eds., *The Cambridge Companion to Philosophical Methodology* (Cambridge University Press, 2017年), A. Berthoz and J.-L. Petit, dir., *Complexité-Simplicité* (Collège de France, 2014).

兼本浩祐 (かねもと・こうすけ) 愛知医科大学精神科学講座・教授。臨床てんかん学、精神病理学。1957年生。『てんかん学ハンドブック 第3版』(医学書院、2012年)、『心はどこまで脳なのだろうか (神経心理学コレクション)』(医学書院、2011年)、『脳を通して私が生まれるとき』(日本評論社、2016年)。

三宅岳史 (みやけ・たけし) 香川大学教育学部・准教授、博士(文学)。哲学、西洋哲学史(フランス近代)、科学史。1972年生。『ベルクソン哲学と科学との対話』(京都大学学術出版会、2012年)、「リーマンと心理学、そして哲学」(『現代思想』臨時増刊号 総特集：リーマン、2016年)。

ユリア・ポドロガ (Ioulia Podoroga) ジュネーブ大学研究員。20世紀フランス哲学(特に時間の問題)、芸術の哲学(特に芸術家論)。1978年生。*Penser en durée. Bergson au fil de ses images* (L’Age d’Homme, 2014), *Kandinsky, Malévitch, Filonov et la philosophie. Les systèmes d’abstraction dans l’avant-garde russe* (avec J.-Ph. Jaccard, Editions Cécile Defaut, 2017).

増田靖彦 (ますだ・やすひこ) 龍谷大学・教授。哲学、現代思想。1967年生。『21世紀の哲学をひらく』(ミネルヴァ書房、2016年、共編著)、訳書にベルクソン『笑い』(光文社、2016年)など。

● 訳者紹介（掲載順）

**天野恵美理**（あまの・えみり） 大阪大学大学院文学研究科・博士後期課程。バルクソン哲学。1984年生。「バルクソン『物質と記憶』における「私の知覚」の形成段階について——二章のヴァリエントとの比較を通じて」（『メタフュシカ』、大阪大学大学院文学研究科哲学講座、第46号、2015年）、「『物質と記憶』における身体の問題——ヴァリエントとの比較を通じて」（『アルケー』、関西哲学会、第23号、2015年）。

**木山裕登**（きやま・やすと） 東京大学およびトウールーズ大学・博士課程。バルクソン哲学。1987年生。「バルクソン「意識の諸平面」概念の心理学的背景」（『論集』32、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、2013年）「バルクソンとフイエにおけるオートマティスム問題」（『論集』33、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、2014年）。

**齋藤俊太**（さいとう・しゅんた） 株式会社 Preferred Networks・リサーチャー。コンピュータビジョン（計算機視覚）。1986年生。Masaki Saito, Eiichiro Matsumoto, Shunta Saito, “Temporal Generative Adversarial Nets with Singular Value Clipping”, International Conference on Computer Vision (ICCV), 2017. Satoshi Tsutsui, Tommi Kerola, Shunta Saito, “Distantly Supervised Road Segmentation”, ICCV Workshop (CVRSUAD), 2017.

**山根秀介**（やまね・しゅうすけ） 舞鶴工業高等専門学校・助教。宗教哲学。1987年生。「ウィリアム・ジェイムズの多元的存在論とバルクソンの持続的存在論」（『宗教哲学研究』第33号、2016年）、「ウィリアム・ジェイムズのプラグマティズムにおける実在とその認識」（『哲学』第68号、2017年）、「バルクソン『試論』における「持続」の一と多」（『宗教学研究室紀要』第10号、2013年）。

**原健一**（はら・けんいち） 北海道大学大学院文学研究科・博士後期課程。バルクソン哲学。「『物質と記憶』第一章における哲学の開始——イマージュ論と純粋知覚論の関係について」（日仏哲学会編『フランス哲学思想研究』第21号、2016年）、「なぜ再認は進展でなければいけないのか——バルクソン『物質と記憶』第二章における記憶の実在証明」（東北哲学会編『東北哲学会年報』第33号、2017年）。

**田村康貴**（たむら・こうき） 東北大学大学院文学研究科・博士後期課程。近現代フランス哲学・倫理学。1984年生。

**持地秀紀**（もちぢ・ひでき） 上智大学大学院哲学研究科・博士後期課程。バルクソン哲学。1989年生。